

## 戦時下、県内における隧道工事、地下工場建設（菊池実講師）

講師（菊池実さん）略歴

1954年12月生まれ。公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を2015年退職後、中国のハルビン師範大学に3年半、重慶にある四川外国語大学教授として3年勤務。その間、新潟大学非常勤講師も兼務。2021年7月末日に6年半の中国での勤務を終えて帰国。現在は立正大学非常勤講師（考古学）、河北外国語大学講師（日本語教育）、さらに日本と中国大連にある日本語学校でも留学生教育に携わっている。明治大学で博士（史学）の学位を取得。

## 1、戦後78年の歳月、戦争を語り継ぐために

## (1) 今年に戦後78年

終戦時、小学生だった人も85歳以上。この年齢層は人口の4.9%（2020年）。これは今後どんどん少なくなり、将来的には体験世代がいなくなる。戦争をどう語り継いでいくかが大きな課題。戦争体験の風化を防ぎ、戦中・戦後のアジア諸国民の労苦（植民地支配と侵略戦争の被害）を考えるため、モノ（遺跡と遺物）を介在させて人から人への継承、戦争遺跡の調査研究と保存活用が重要で、戦争を語る場としての遺跡や博物館が大きな役割を果たす。

## (2) 物の問題

- ①遺跡の劣化…鉄筋コンクリートでも平均寿命は50～60年。さらに、海中の物（沖縄周辺には特攻機の残骸などが沈んでいる）の保存も問題だ。
- ②遺物の劣化…万年筆文字が退色で読めなくなる。
- ③私設博物館の閉鎖…集めた遺物をどうするのが問題。前橋の「あたご歴史資料館」は前橋市が引き継ぐ方向で準備中のような。

## 2、隧道工事・地下工場に動員された朝鮮人・中国人

## (1) なぜ、朝鮮人や中国人が使われたのか

1937（昭和12）年の盧溝橋事件から始まる日中戦争で、軍隊への徴集、召集が増え、国内は深刻な労働者不足となったため、朝鮮や中国から人を国内に動員する計画がつけられた。

## (2) 朝鮮人の労務動員（徴用）

1939年から45年にかけて実施された朝鮮人の強制移住（約126万人）で、過酷な労働、虐待、虐殺による死亡者も多く、厚生省によればその数は1万～4万または6万人とも。死亡率0.8～3.2または4.8%。

## (3) 中国人の強制連行

敗戦までに3万8,939名が全国35企業135事業場（鉱

山・土建・港湾）に。死亡率は17.6%で、朝鮮人に比べはるかに高い値になっている。

## (4) 特種（特殊）工人

中国から日本への強制連行以前に、華北での中国人捕虜や周辺村の若者を捕らえて満州に送り、撫順炭鉱やソ満国境の要塞建設工事などに使った。この人たちは特種（特殊）工人と呼ばれた。関係資料（関東軍文書）は焼却処分されて国内には残っていないが、旧満州国首都だった新京（長春）の旧関東軍司令部庁舎の地下倉庫に残っていた。私は中国の大学に勤務していた時、この資料を安価に入手することができた。

五味川純平（1916～95）が自らの従軍体験をもとに著した『人間の條件』（1995年）の中に特種（特殊）工人のことが出てくる。

## 3、群馬県下の状況

群馬県の文書（1945年4月）によれば、1944年末現在の朝鮮人は1万2,356人、また、1953年調査での中国人連行者892名、死亡者109名、帰還者782名、残留者1名。

## (1) 岩本発電所の隧道工事

軍事物資増産のための電力が不足、その対策として利根川水系に設置された。1943年7月1日から工事に着手。利根川上流の取水口から岩本まで大部分が隧道で、距離は約14.4キロ。工事に動員されたのは朝鮮人と中国人で、朝鮮人の数は約1,000名、中国人は606名。両者の飯場は離され同じ現場で働かされなかった。掘削、土砂搬出などの最も危険な作業をしたのが中国人（戦後の裁判で、当事者が危険な作



業内容を証言している)。朝鮮人は中国人とは違った作業をし、その周辺に勤労働員された日本人がいた。

1945年2月に仮通水、だが、3月の東京大空襲で水圧鉄管の製造所が消失、また戦災による電力需要の激減で緊急施工の必要性がなくなったため工事は中断、工事に従事していた人たちは、利根川対岸の古馬牧村後閑(現水上町後閑)の中島飛行機地下工場建設に動員されていった。

## (2) 隧道工事での死者数

中国人死亡者43名、負傷者246名。中国人についての実態は確認されているが、朝鮮人死亡者については明確ではない。如意寺の過去帳や旧月夜野町役場の埋葬原簿(現在はなくなっている)で確認できる程度だ。劣悪条件に耐えられず逃亡する者も相次いだ。死亡者の中には入水、溺死、飢餓過労死などの記載もある。

## 4. 米軍の空襲と地下工場建設

### (1) 本土空襲—マリアナ基地からのB29による空襲

- ①第1段階—1944(昭19)年11月24日～航空機工場への高々度昼間精密爆撃
- ②第2段階—1945(昭20)年3月10日～大都市に対する夜間大量焼夷弾爆撃
- ③沖縄戦(3月26日・アメリカ軍の慶良間諸島への上陸～6月23日・組織的な戦闘終了)—この間、アメリカ軍は沖縄戦に集中するとともに、九州にある特攻機の出撃基地への攻撃を行った。この間、本土ではほとんど空襲がなかった。
- ④第3段階—1945(昭20)年6月17日～地方中小都市に対する夜間焼夷弾爆撃

### (2) 群馬県下への空襲—1945(昭20)年

- ・2月～4月—中島飛行機太田製作所、同小泉製作所への空襲(戦後、水俣の写真で有名になったユージン・スミスが搭乗、撮影した写真あり)
- ・7月—県内飛行場への空襲、列車、軍事施設、工場と橋梁、水力発電プラントへ空襲。橋梁や鉄道関係への空襲は日本軍の移動を防ぐため。
- ・8月—市街地への空襲  
(8月5～6日・前橋、8月14～15日・伊勢崎)

### (3) 中島飛行機小泉製作所尾島工場の地下工場跡

利根郡月夜野町後閑(現みなかみ町)にあり工事は海軍の設営隊(三上部隊)と間組によって行われた。岩本発電所工事に動員された中国人、朝鮮人の他、尾島工場の工員800名、郡内の青少年約150名による勤労報

国隊などが工事に参加。1945年8月10日に完成、すぐに敗戦。

中国人の死亡者(45年3月～9月)は10名、7月に死亡した1名は鶴嘴による殴打死。負傷者83名。工事で多数の捕虜を使役したことで、戦後、出張所次長らが戦犯として裁判になったが、占領軍の方針転換のため裁判は中止となった。

## (4) 陸軍火薬製造所の地下工場跡

97年に論文をまとめた時、圧倒的に多かったのは勤労働員された地元民の証言で、中国人、朝鮮全国3ヶ所、群馬県では沼田市上川田に所在し、後閑地下工場の南3kmに位置。後閑地下工場の工事着工から3ヶ月後に工事開始。この時も、発電所工事や中島飛行機地下工場建設に関わった間組の杉浦堯が、陸軍技術嘱託と陸海軍将校を兼ねて工事にあたっている。

「1945年兵器製造施設地下工場建設計画調査表」(占領軍に提出するために戦後すぐにまとめられた資料)によれば、この地下工場は岩鼻の火薬製造所だけでなく、東京の板橋製造所、京都の宇治火薬製造所、昭和電工などを集合・収容する施設だったことが分かる。中に入ってみると、飛行機地下工場と違って、掘削による石屑(ズリ)がたまっている。爆発事故に対処するため土塁として利用したのではないかと。

## 5. 聞き取り調査の重要性(1997年菊池論文で指摘)

97年に論文をまとめた時、圧倒的に多かったのは勤労働員された地元民の証言で、中国人、朝鮮人の証言はゼロ、軍関係者を何とか探そうとした。中島飛行機小泉工場地下工場の責任者であった三上善蔵(元技術大尉)氏は前橋在住だったので話を聞いたが、肝心なこと(中国人や朝鮮人の事)は話してくれなかった。

その後、裁判(損害賠償請求訴訟)が始まって、連行された複数の当事者の証言があったが、今もって関わった軍関係者の証言は確認することができない。間組の社史にはある程度工事の事が書かれているが、関係資料を見せてもらうことはできなかった。

## 6. 記憶の提携、連携

集団、個人の記憶が投影されたものが戦争遺跡。それを調査・研究することで、加害と被害の事実や法的な謝罪・補償の必要性が明らかになる。それにより初めて和解が成立する。その意味で、戦争遺跡は将来に向かって人類への警告の場になる。(文責 設楽春樹)